

【論 説】

『平和の訴え (Querela Pacis), 1517』の分析

藤 本 吉 蔵

目 次

- 1 プロローグ
- 2 理論構成の把握
 - 作業 I
 - 作業 II
 - 作業 III
- 3 著作背景と内容分析
- 4 エピローグ
 - 挫折に関する考察—

1 プロローグ

この小論では、プラトン主義の再生を模索したトマス・モア (Thomas More, 1480 ~ 1535) やアリストテレスの復興を図ったニッコロ・マキアヴェリ (Nicholo Machiavelli, 1465 ~ 1527)¹⁾ と同じ時期に、宗教改革の戦火が熾り、特に封建的政治秩序の崩壊と共にヨーロッパのヘゲモニーをめぐる戦争が繰り上げられつつある情勢²⁾ を憂いてものしたデジデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus, 1446 ~ 1536)³⁾ の『平和の訴え (Querela Pacis), 1517』をとりあげ⁴⁾、そこに展開されている彼の平和への悲願をこめた論旨、またそれが如何なる理由で挫折したかを私なりに確認したいと思っている。この作業を通して、筆者の主要研究課題であるスピノザが登場する以前のオランダの共

和主義的政治、都市貴族の自由主義的経済活動、宗教諸セクトを容認するヒューマニズムが浮かび上がり、延てはスピノザ政治理論を理解する上での貴重な示唆を得ることができるのではないのかと思えてならないからである。

ところで、エラスムスがフローベン書店より上梓したこの小品は⁵⁾、平和の神 (Pax) が語り掛ける体裁を採って、先ず平和に対して人間が見せている甚だしい無頓着な現状に言及し⁶⁾、次いで「事物の本質＝自分にひきつける力＝和合の宇宙原理性」を開示しつつ、事物の中でも人間は被造物としての特性上この原理に忠実でなければならぬと論じて様々の例証を掲げている⁷⁾。更に、人間を“Erinnys”が狂わせ、人間の誰れの処にも平和の安住できる場はない現状であるにも拘らず、彼らはキリスト教徒と称し、恥じる気配もなく仮面をかぶって現実を美化さえしていると断じてもいる⁸⁾。こうして、聖書によるキリストの言行に依拠しながら、その全生涯の意味するものに目を向け、これら聖典全体の語っていることは平和と一致協力のみであると帰結する。従ってキリスト教徒という言葉の口にする者は、この教えを守らなければならぬ筈である。しかるに、彼らの事としているのは“bella”のみであるとして、これよりキリスト教徒のあるべき姿を底面に踏まえながら今日の人々の背信、異教徒にも劣る墮落のさま、これらをその飽くことのない、残忍極まりのない戦争の中に見出し、少数者が多数者の幸福を踏みにじるといった不条理の数々を描出してゆくのである⁹⁾。

こうして戦争の反キリスト的な本質、また損得勘定の上からも間尺に合わない点を重疊的に説いて和合の原理に立脚し、平和への提案を行うことになるのである。彼はこういった提言の基底をなしている原理に対し、キリスト教徒同士の戦いは戦争の名に値いしない反乱であるときめつけ、異教徒に対するキリスト教の勝利のためにも是非同士討ちの醜態だけは避けるべきであるとする。特に全体の福祉への志向こそキリスト教君主を始めとする指導者たちの座右の銘でなければならぬとするのである。特にトルコ人に対してキリスト教の勝利を念願切望するなら自分らの間での和合によるよき実例の示現こそ先決問題であり、そのためには一刻も早くつまらぬ、愚かしい口実を設けての戦争に終止

符を打つ必要があると呼びかけ, “Dixi”をもってこの小品を閉じるのである⁹⁾。

ところで、この小品の梗概を辿ってみると、一つの結論に向っての起承転結といった流れをなしているというよりはロンドに似た同じ主題の重疊的展開が見られているようである。平和への熱望にかられたテンペストさながらのエラスムスの感情起伏が脈うっているといえよう。そこでこういった彼の深層心理を背景としながら、行論をも少し構造的にとらえてゆくことにしたい。

2 理論構成の把握

この小品の構造を鳥瞰すると、Ⅰ．共同体のモデル、Ⅱ．このモデルとの乖離を呈する現況、Ⅲ．この状況に対する治療方法の提案といった三部分から成り立っているように思われる。そこで、こういった観点から『平和の訴え』の構造に関する分析作業を行うことにする。

作業 Ⅰ¹⁾

エラスムスは、この論述の基底に被造物としての人間の本性をおく。群生は動物の生展開の特徴をなすものであるが、これは被造物全般に見られる親近性の証左である。蓋し、この世に在るもので協力を必要とせぬ程完全なものはないからである。中でも人間は他の動物に共有されていないものとして言語と理性の力を与えられ、これによって自然にふさわしい道理を弁別し得るが、これとひきかえに自衛のための防御手段と武器は許されずその上、か弱いものとして創られることになった。こういった被造物としての特性は肉体的にも精神的にも十全な能力を具備した存立を認めないだけでなく、自分一人では万事に事足らぬという欠格性を増幅させる結果となる。この為人は自分の安全保障を図る上でどうしても相互の盟約と親密な関係が不可欠であり、力を合わせて始めて他の動物並みに身を守ることができるようになるのである。従って、生誕以来親と子との間に芽生え、はぐくまれる親愛の情を基底に踏まえた協調と結合の共同体こそ人間存立の絶対条件となるといえよう。この為に自然は多くの論拠で平和と協調を教え様々の魅力を駆使して誘い、多数の綱で引き寄せてい

るのである。

ところで、こういった共同体は儚いあぶくの如き生命をもち、生まれた時から数々の不幸にさらされている。「同じ法則の下で生まれ＝同じ必然性によって老い果て＝同じ至高の父の下におかれ＝特に何ものをも容赦しない“mors”の現実に平等にひれ伏さねばならない」人間が構成するものとして一つの全体的普遍社会を形づくっているといえよう。これこそ主の恩恵を受けた人々の魂が絶妙に通い会う至福の実現されている場なのである。正に人間存在の在るべき姿であり、和合こそこれを一層強化確保させる道というべきである。こうしてエラスムスは、人間各自が、召命的運命共同体である所謂先験所与的な生存構造に合致した全体社会の一員として調和して生き、更にこの全体的和合を堅固ものとして生きることこそ人に課された第一の義務であると考えている。これによって正しく安定であるエウダイモニオンを得ることができると見ているわけなのである。

では、こうした真理がどうして曇らされるのであろうか。それは全ての存立自体が自足的全体的でないところからくるのである。この世の存在には不同であると同時に調和が存し、これによって平行を保持して行くという二面が常にある。例えば、生命そのものが肉体と靈魂という氷炭ほどにも異なったものの結合状態であることはその端的な証左なのである。つまり普遍はポテンシャルとして部分的な“actus”によってエネルギー化されざるを得ぬ訳だからだといえよう。従って、人間の実生活の場は地方毎に集落都市を造成し、社会連合体を構成しつつ、それぞれの地で部分的に実現されている。しかし、かかるエネルギーのみに目を奪われるべきではなく、常にポテンシャルとしての普遍的共同体こそ基底に踏まえられていなければならない。全体性の一つの“typus”として現実をとらえ、かかる普遍への志向をもつことが正に人々の責務なのである。この為、あらゆる文物が花と咲き誇り見事に建設された都市・よく耕やされた田畑・この上もなく優れた法律・尊重すべき訓育・気高い風習が見られる国家をこの世で偉大なものとして讃えるが、そこには部分的共同体を公共の利益²⁾が支え、この普遍的共同体の真理にかなった合理的なもの

としての平和、和合、協調が息づいているからに他ならないのである。

ところで、造物主は、こういった普遍的共同体の部分社会的更には個人による実現といった必然について、各自に自然の感性や人間性を賦与し、理性によって理解する可能性を開いている。いや更にその上に、人間の幸福の導き手たる創始者として我が子キリストまで遣し、多くの絆で人々を結びつけようとされている。この神の愛にこそキリスト教の真理性が存している。だからこそキリストは平和の君主として人々の和合を説かれたのである。正しく、キリストの全生涯は和合と相互の愛を教える以外の何ものでないといってよい。キリストは自らを羊飼ひ、葡萄の幹、翼の下に雛を抱き集めている雌鶏になぞらえて、悪に対して抵抗することを一切許さず、人の不幸を願う者にも幸福を祈ることを弟子達に命ぜられ、敵との平和や相互の愛を説いた。また、人民の君主たんとする者は大多数の人々に役立つ点で何人よりも秀いでており、人民の下僕として奉仕すべしとも教えた。一体これらのことは何を意味しているのだろうか。キリストは兄弟たちと和解ができるまで供物をその祭壇の前に残し、主に献じないよう命ぜられ、半ばユダヤ的であったペテロが命に関わる危害に遭われた時剣を構えたのをとがめて鞘に収めるようにさとされた。これらは何れも流血行為を憎み敵との平和と相互³⁾の愛の実をあげるよう、つまりは自分を絆としてとりあげることを願われたからに他ならないのである。だからこそこの一体的和合の福音の為に自分の命を十字架によって与えることで自分の血を流してまで人々の罪をあがない救おうとされたのである。このキリストの御心こそ普遍的共同体の形成原理である一体性の象徴であり、これこそ被造物としての人間の本性に則したもののなのである。そしてこの自然の絆を更にその教えでキリストと一体となり網鉄の絆に鍛え上げてゆくところにキリスト教の真理性が存している。つまり和合を基体として睦い合い集い合うエクレスシアに身を置きキリストの教えに示されたこの真理性を媒介とし、ポテンシャルであるこの普遍的共同体の実現に努めることこそ被造物としての主の愛にこたえる所以であり、いわば人の生に課された至上命令なのだと言えよう。だからキリストの示された道を和合を心がけて辿ることこそ人が神に対してなす報恩の行な

いであり、そこに二重の意味での“typus”⁴⁾ が存しているのである。

作業 II⁵⁾

ところで被造物のこういった本質に対して開かれた、いわば自然の絆を捉える理性の眼とキリストの教えによる信仰の力即ちキリストの絆によって強く真理の光を放ってやまない、こういった普遍的共同体モデルの現勢化状況はどうであろうか。ここでエラスムスは特に彼が身をもって体験した10年から12年前の歴史的現実を目を向け、そこにあまりにもモデルと隔った事態を発見する。理性と信仰の相乗効果で、強められた筈のこういったモデル的普遍共同体を支える原理ともいうべき和合と協力は弊履の如くふみにじられて、平和の安住できる場はどこにもない。それどころか自然の手で武器をとりあげられている人間は大砲といった途方もない殺りく用の道具をあみ出し、到る処で戦争をエスカレートさせ修羅の巷を現出させているのである。キリスト教徒がキリスト教徒に戦いを挑み同胞を塗炭の苦しみにおいやっている。これは正に神とキリストへの全くの背信に他ならず、戦争とは名ばかりで、プラトーンのいう“反乱”に熱中しているのが現状なのである。しかも、最も許し難いのはとるに足らぬ理由で、この世にあってキリストのお姿を表象しているはずの和合の師表、上帝の代表者としての任務を課され、公益のみを正しく管理し、正しい意見と節度を示し、その權威で民衆の動揺、騒乱を鎮める義務のある君主たち、民衆の為の英知を有して、最良の人民を統治する時始めて自らを偉大と考え、人民を幸福にして自らを幸福と思い、富裕、繁栄を人民とともにし、国民全体の福祉を束の間も忘れず、文字通り国家キリスト教徒の師父としてキリスト教徒を幸福に統治すべき君主たち、彼らこそ掠奪、流血、殺人、破壊をほしいままにして、一切を攪乱し、キリスト教徒として血を分けた者に、いやまして兄弟である人々の腹に兇剣を刺し込んでいるのである。この人間界の事運がその意向にかかっているといえるこれらの君主たちが、異教徒たちも敢えてしない残忍さで野獣をはるかに越えるいわば自然の掟に背いた地獄の兵器まで動員する大量殺戮戦を事とし、70才の戦士を賞むべきものとする倒錯をうみ、極悪罪業ともいうべき無益な戦争の源泉と温床となっているのである。その上に、これら

キリスト教を奉ずる君主たちに、タルタロスの毒薬のように戦争を教唆する為東奔西走し、それでも足りぬとでもいうように自ら従軍しエクレスシアをカストラに変えて野戦の指揮官となり、ペローナに仕えているのが本来キリスト教徒らしい生活の指南役である完き宗教の教師たるべき聖職者たちなのである。特にこれら聖職者が戦争によってつくられている現状は言語道断な不条理というべきであり、だからこそ司牧たるべきローマ教皇までが手に武器をとっている有様なのである。この為に、かの地獄の兵器である、あの呪われた大砲にまで使徒の名をつけ、聖人たちの像を刻み込んで恥じることもなく、聖堂の中に血に染った戦利品を堂々と持ち込み、陣営では十字架の下でミサ聖祭が催され兵士たちはそこから殺りくの場に赴くといった餓鬼道の極みが横行しているのである。しかも、聖職者は様々の口実を設けては予言者の言葉や使徒たちの訓えをすりかえ、戦争激発を事としこれに狂奔しながら、平然として聖堂や祭壇に近ずき、全く形骸と化した儀式をとり行なっているのである。こうして和合の集いの場であるエクレスシアは前述のように本質的には水と油ほど懸隔のあるカストラと化し、エクレスシアが表象している天のエルサレムを自己流に想定し、空洞化され、実質は不信心な行為にも篤信と銘打ち、伸びゆくキリスト国家への道が抃げられると称しているのである。これこそ正しく狂気でなくて何んでもあろうか。世界はこれら一部のスキゾイドの為に牛耳られ、災厄に責めのない罪なき民衆が徒らに苦しめられる地獄図となっている。そこにはモデルと現実との全くの乖離しか見られない。あの好戦的なローマでさえ、時にはヤヌスの神殿の扉が閉まったこともあったのに、平和と一致協力を語り教えている聖典の民であるキリスト教徒は戦いに明け暮れ安らかな日のない有様である。団体と団体、国と国、党派と党派、そして君主と君主とが角を突き合わせ、かげろうのように儚い命しかない小賢い、たった二人の愚かな振舞いと野望の為に人間本来の面目が本末顛倒の混乱状態に陥っている。正にキリスト教徒としての本分に立ち戻るか、さもなくば名分を棄て、はっきりと悪魔の民と称するか、その岐路におかれているのが、今日の状況なのである。

作業 Ⅲ⁶⁾

ところで、世界の創造主の意思は一体どこに存するのであろうか。その子キリストを遣すほど人間を愛することが深いのであるからその破滅をお望みでないことは確かである。とすれば、これら一連の今日的な状況はプシコーゼによる不条理であり、人の持病によるものと見なければならぬ。

さて、健康は有機体の全ての機能の間に存する調和状態なのであるから、少し理性の眼を開けば一切が恒久的な和合に向うように促がしているのが分る筈である。キリスト教徒は既に十分なくらい血を流して、長い間トルコ人の目を楽しませる出し物を演じてきた。また大多数の一般民衆は戦争を憎み彼らの平和を悲願している声が聞えてくる。それにこれまで経験した数々の戦争は、悲惨さがどんなに尾をひき、いかに間尺に合わぬものかを身にしみて感じさせている。キリスト教を異教徒に信じさせる為にもキリストが何よりも憎まれた戦争をキリスト教徒自身の手で止めねばならぬ時機が来ているといえよう。現にキリスト教指導者の中にも神の靈感に魂を鼓舞され和合に傾いているレオ教皇、フランス国王フランソワ1世、カルロス1世、マキシミリアン皇帝、イギリス王ヘンリー8世といった人々も見られるのである。今こそキリスト教徒は、この真理に向って努力し、本分に立ちかえる道を模索せねばならぬのである。こうしてエラスムスはモデルと現実との乖離の、原理、エリーニウスに酔わせられたものの病理分析に先ず目を向け、その治療の方途を探ることとなるのである。

〔病理診断〕エラスムスは平和の神 (Pax) の口をかりて、開戦理由となっているものを列挙し、戦争の病理に迫ってゆく。戦争の魔薬に酔わせられて、地獄の“Furiae”に犠牲を献げているのは極く一握りの、神を畏れぬ、私腹を肥やすことに専念する司令官、彼らをあごで指図するこの世のお偉方、これらの者こそ戦争の原因をつくり出している元凶であることを確認した上で、開戦理由を掲げる。それによると、或る者は時代後れの廃れた権利を楯にとり、また百ヶ条にも及ぶ条約の中に一つだけ記載されていない事柄を口実にして戦争を仕掛けています。そうかと思うと許婚者を拒絶されたとか、奪われたとか、はた

また少し冗談がすぎたとか、些細な無礼にたっぷり報復せねばならぬといったことが開戦の理由となっているのである。更にフランス王国の不当な嫉視に象徴されているように、民衆の和合こそ敵であると思いこみ、自分から不和の種をまき散らして、自然が分けてもいないものを無理に引き裂き、分裂の口実をやっきになって探しまわっている始末である。そして尤もらしい開戦理由の見あたらず場合にはそのねつ造さえ敢えて行ない、付和雷同する者もいるのが今日の姿なのである。とにかく猫の額のような土地獲得、期日まで返済されない、貸したことにすらならぬ僅かな金銭など些細な取るに足らぬ事まで開戦の理由とされ、全く戦争の種にならぬものはない態たらくである。確かにこれらの口実は彼らの狂った耳には尤もらしく聞えても、その底にあるものを冷静に見れば憤怒と野望と愚昧であり、軽率で儂いものである。それらは破廉恥極まりない、公共の一丁字さえもない全くの私的利益から出た低劣、邪悪な貧慾であり、人の本来の面目にたった必然と目されるべきものでないのである。そこで善良な全体の意志よりも一握りのよこしまな連中の意向が優位を占め、全体を倭小化し、人間本来の全体拡張とは本末転倒の逆志向をとりながらも、尚お且つ拡張を希うといった背理を犯しているのである。つまり彼らは自分たちの幸福を確保する為よりも、寧ろ自分たちを害ねることにより多くの知恵を働かせ、生れた時からの苦難に加えて重ねて不幸を求めるという狂おしさで愚かさの傀儡なのである。こうして他のものが営々として築いた文物、都市、村落、教会などを灰燼に帰さしめ畑を荒廃させて物資の自由な交易を妨げ、学芸を衰微させるといった犠牲を払いながら、寄せ集めの無頼の徒に阿諛し、自由の市民を苦しませ、辻強盗、近親者殺しにまさる悪しき人々に領内を潤歩させ、公衆の風俗や規律の弛緩といった何物にもかえ難い宝を失なう羽目になっているのである。また既述のように不信心な行為を篤信と称し、兜と司教冠、教皇杖と軍刀、聖福音書と楯といった本質上相反するものを結びつけ、聖書の御言葉を勝手に臆面もなくねじ曲げ、一切の儀式、教会そのもの、キリスト教の教えそのものを全く空洞化してしまっているわけである。既にモデル提示のところで触れたようにキリストの教えは睦み合い、集い合いの真のエクレシアにあり、それは

人がその本質を内観し、その上で集合による効率的な相乗効果に拡張の場を求めるところにある。つまり和合による補正に拡張の座を見定め、これによって人の本質的な拡張志向を部分としての理性的思慮を媒介として、より全体的な方向に定位し、これを信仰で強化して、同一方向での重合をはかるべきなのである。つまり被造物としての存在に内在する原理に忠実な動きをとるのが必然であり、倭小な部分的情念をそのまま全体と見るこの人の存在構造と反した逆志向的収斂の清算こそが必須と考えるわけである。この為にはキリストの教えを、自然の絆をたよりにしていれば理性の眼で捉えた人間の生の本質的な構造のままに歴史的歪曲から解放し、キリストの教えそのものの確認、かかる順列化こそ急務と見るのである。つまり、聖典を眺めやる眼を自由にし、自分の中にいびいている秘められた囁き、心の底で呼びかけているキリストの声に耳を傾けねばならないとするのである。これで始めて形骸化した儀式や教会、歴史的に歪曲された教義に一つの心、一つの魂を吹きこみ蘇生させ得ることになる。エラスムスはここで外的素材を媒介にした主体拡張に二つの秩序を見ているようにである。つまり、部分存在でしかない倭小化された個に焦点を合わせて国民全体の福祉を忘れることは魂から切り離された、正に肉体に照応するものであり、かかる志向は可視的な、消え去る煙と同じものを不滅なものと思ひ込み、幻影を真理と誤認する似而非拡張でしかないわけなのである。しかし、人生の涯にある永遠の世界への至福の生は人の肉体と魂の全体的な共生和合的な一体性を媒介とした、可視的な形而下性にのみ執着しない、剰余項としての昇華による誘導電流に似た高次性を有し、部分を全体へ志向させてゆくところにとの本体があると見るのである。いわば可視的なものにのみ拘泥する部分的収斂性を不可視な全体への流れに解放し、転換させた拡張を考えねばならぬとするわけであり、そこに自然とキリストの真理性が存しているとするのである。この和合に象徴されている、昇華的な全体拡張の力学にこそ、部分的固着にふりまわされている近視的な同時代の偏執狂を治癒する処方を見たと言い得よう。

〔治療の処方箋提示〕こういった病理診断に依拠しつつ難治ではあるが、決

して回復の可能性が皆無とは言えない“現代病”に対して平和への提言という形でエラスムスは一連の処方箋を書くこととなる。彼は先ず縁組や条約で堅固な平和の確立される見込みはないと述べ、自分の為のよこしまな貪欲をすて、民のため英明であり、民全体のことを配慮する見識を君主はもつべきであるとするのである。しかし、君主一人の力では不十分だから、貴族や法官たちも、この心構えを模し、人間として人間を、自由人として自由人を、キリスト教徒としてキリスト教徒を統治しているのだという姿勢を忘れてはならない。そして人民も善き君主に対しては公の用に供するものは全て差し出し、悪いものには国民の一致した決議によって抑え、私益を理性に従属させねばならない。エラスムスはこういった全体志向にたって知力と決断によって和合を取り戻すべきであり、この点で、かのディオクレティアヌス帝の英慮、オクタヴィアヌス、二人のアントニーヌス帝の心構えを身につけ、元来自由を本質とする国家を私有物のように心得て、その主権を婚姻取組みの対象としたり、その他譲渡売却することは慎まねばならないとみる。こういった主権者の頻繁な交替は国家の自由を尊重する道からはずれた背理だからである。この為に治める領地を明確に画定して、これを遵守し、また王位の継承についても血縁関係の最も近い者又人民投票によって最適任と認められた者を後継者とするといったようにその順序と手続とを定めねばならぬ。それと共に諺にもいうように額は後頭部よりも近いという道理を踏まえて、あまり自国を離れないように心がける必要があり、自国民をよくした時自分も豊かになったと考える様な方向で一切を処理する必要がある。また、戦争が問題になった折にも全国民の承認を前提とし、一都市を建設するくらいの出費を要する他、国庫を枯渇させ、民衆を身ぐるみはいで、善人のみを苦しめて悪人の乱暴を許す、どう見ても損害の埋め合わせもつかぬ戦争に突入するよりは寧ろ平和を買う覚悟も必要である。そして戦争の諸原因を一刻も早く取り除き、経験不足の若年者や民衆の不幸を喰いものにしている連中に諮問することを避け、慎重で祖国愛に燃えた偏見のない確固たる意見の持主を用い、決して火遊びのような戦争を望んではならない。君主たちは何よりも善政を心懸け、富み栄える領国を子孫たちに残すため精魂を

傾けねばならない。聖職者もまた平和を人々の心に刻み込むというキリスト者本来の義務を果たし、両々相俟って和合の実をあげ、平和を益々確固たるものとし、全ての者を至福に至らしめねばならぬのである。エラスムスは、こういった具体的な処方箋によって、君主、司祭、神学者、司教、市民の長老、官職ある者、更にはキリスト教徒の名に誇りある者全てに呼びかけ、これらのものが心をつにして、一握りの専制的な戦争屋の権力に対抗して、戦争反対ののろしをあげることを切望して、この小品の筆をおくのである。

3 著作背景と内容分析

1) 1517年までのエラスムスの生活

ところで、この小品の著者エラスムスは1466年10月28日ロッテルダムで生れた¹⁾。彼は1495年カンブレール司教の援助をうけてパリに遊学するまでハウダ、デフェンテル、特に後者ではヘルト・フロートの設立した“共同生活兄弟会”²⁾の施設で学び、1487年ハウダに近いステインのアウグスティン派修道院に入った。修練士を経て翌年修道士としての誓願をたてたエラスムスは1492年ユトレヒト司教によって司祭に叙され、パリに赴くまでオランダで生活することになった³⁾。しかし、1493年に思うところあってステインの修道院を離れるが、これは1517年1月26日教皇レオ10世よりの特免状下付に至るまで彼に余計な精力を費させることになる⁴⁾。彼は既述したように、1495年パリの大学で新しい視野を彼なりに開き、やがて自活の為に家庭教師として接していたイギリス貴族マウントジョイ卿ウィリアム・ブラウントの懇請をうけてイギリスに渡った⁵⁾。ヘンリー7世治下のイギリスには1499年夏から翌年にかけて滞在し、特にトーマス・モアの知己を得た⁶⁾。彼はオックスフォードの学的雰囲気の影響をうけて古写本による聖書原典への興味をかきたてられ、まだ見ぬ埋れた文献とそれらを世に出す為のすぐれた印刷者を求めてコロンブスさながらの旅をすることになるのである⁷⁾。彼はパリ、ステイン、ルーヴァン、パリと旅を重ね、1505年には二回目のイギリス訪問を行なう⁸⁾。しかし、1506

年ヘンリー7世の侍医であるイタリア出身のジョヴァンニ・パティスタ・ボエリオに息子のイタリア旅行に随行してくれるように依頼をうけ、3年間イタリアで生活することとなる⁹⁾。トリノ、ボローニャ、フィレンツェ、パヴィア、ローマ、ヴェネツィアと彼はその足を各地にのぼすが、そこで彼を迎えてくれたのは図書館の蔵書とすぐれた印刷業者アルドウス・マヌティウスであった¹⁰⁾。1509年春に彼はイギリス国王ヘンリー7世の訃報に接するが、知己を得ていた皇太子の国王即位によって聖祿をうける期待をかきたてられてイギリスにまた赴いた¹¹⁾。エラスムスはトーマス・モアの家に旅装をとき、ケンブリッジでギリシャ語と神学を教えたが、生活の不安は解消されなかった¹²⁾。しかし、周囲の助力もあって1501年カンタベリー大司教は彼を年金20ポンドのケント教区長に叙任し、彼の経済上の苦難も好転の機を迎えたが¹³⁾、ヘンリー8世の企てた1513年戦争によってイギリスを離れる決意を固め、1514年7月英仏海峡を渡ってバーゼルに赴くこととなるのである¹⁴⁾。バーゼルへの旅の途中ステイン修道院より復帰要請のあったことを知ったエラスムスは有力者の手で修道院拘束より離脱するしかないと考え、彼に好意を寄せている庇護者の多いイギリスと連絡をとって教皇庁への修道士義務の免除を求める訴願状を作成する為に1516年再びイギリスに渡り¹⁵⁾、バーゼル・ロンドンとを往復する忙しい生活が続くのである¹⁶⁾。こうして既述のように『平和の訴え』執筆の年1517年は教皇よりの特免下付であけることになった¹⁷⁾。エラスムスは生活の安定をはかり、安穩な生涯をとる希求からハプスブルク大公カレルの年金付顧問役をひきうける¹⁸⁾とともに当時の出版の中心であるパリ、アントウエルペン、シュトラスブル、バーゼルに近いルーヴアの大学で教鞭をとる決意をするに至ったが¹⁹⁾、エラスムスにとって束の間の絶頂の年1517年はやがて10月31日ルターの95項目にわたる贖宥状反対の意見書発表で大揺れに揺れ、この嵐はエラスムスを巻きこむことになるのである²⁰⁾。

2) エラスムスの後景的社会構造とそこでの問題摘示

叙上のような遍歴を重ね、平和の吟遊詩人さながらの、すぐれた国際人でも

あったエラスムスの生きた15世紀中葉から16世紀前半にかけてのヨーロッパ、特に彼が少年、若年期を過した低地地方社会の動きはどんなものであり、そこで噴出していたものは何か、この点に目を向けることにする。12、13世紀西ヨーロッパ諸国は早くも経済の構造変化を孕みつつあった²¹⁾。既に10、11世紀²²⁾にヨーロッパは“商業の復活”現象を体験し始めており、特に重要な商業地形成のパン種ともなった、所謂“ヴイク集落”²³⁾は当時のヨーロッパ社会経済体制変貌の軸をなすものであった。つまり、これらのヴイク集落を基底にして、従来までの自然経済的な再生産方式にこれとは別次元の交換経済が都市宣誓共同体を中心として混入し、かくて使用価値に対して交換価値が分立²⁴⁾するに至ると封建農村に様々の形で影響が及ぶことになった。特にボツカチオのデカメロンに語られる如く、イタリア、スペイン、フランスの沿岸地方にアジアから東方貿易に従事する商人によって伝播された1347年に始まるペストは深刻な結果をもたらした。領主は全般的に荒廃した農民保有地を耕作する農民に譲歩せざるを得なくなり、封建社会内部にあった様々の変動要因²⁵⁾はこういった諸現象を媒介にして増幅され、所謂“封建制の危機”を現出させた²⁶⁾。14世紀後半以降都市にあっても、農村においてもツunft闘争、農民一揆が続発したがこれは新しい価値形態の浸透に対して、都市、農村が示した各種の対応の縮図でもあった²⁷⁾。つまり封建騎士層の没落、これに代る商人の抬頭とその問屋制的ギルド支配傾斜、荘園の解体、農民上層部の自営農民化といった中世的有機体的組織原理の一連の後退化現象が胎動しつつあったのである。こういった中世共同体の基底に見られる状況は共同体成員を使用価値と並ぶ交換価値への傾斜を伴いつつ共同体より分出させていったと言えよう。ここでは、個の群れたる大衆の噴出が生じていたのである。尤も14世紀英仏での農民一揆、16世紀の農民戦争挫折に見る如くこれらの群れは未だ中世的な身分枠を脱却できず、それゆえにジャックリーの乱で露呈されたように他との連合を必要としながら、その間に共通項の明確な措定がないままに分裂し支配階級の手で鎮圧される宿命²⁸⁾を担ったものであった。しかし、それにも拘らず、そこにはこれまでの比較的画一的な身分枠に代って、より多岐的な価値分化に対応

する商人、ギルド手工業者、上下に分解する農民層などが見られ、単純なヒエラルヒーによる組織原理がその有効性を失いつつあったことは確かである。こういった動きは中世の枠組そのものを揺がすまでには至っていないが、少なくともこれまでの垂直的志向に代って、より水平的な再編を要するところまで来ていたといえよう²⁹⁾。だから15世紀半ば頃まで農民による“古い権利の為の戦い”という性格であったドイツ農民一揆が次第にその指導理念に新しい要素を加え“ブントシュー”的な復古による革新に変身していった³⁰⁾経過はこの動きの証左とも見ることができよう。こういった過渡的な個の噴出とそれへの対応がまさに15世紀末から16世紀始めにかけての過渡的な社会再編期な課題だったのであり³¹⁾、そこにエラスムスが、“fui, veni, praedixi”したわけなのである。

ところで、既にで説いたエラスムス思惟構造に内在する、中世的枠組への忠実さと水平的思考とは正にこういった過渡期的再編と関っているものであるが、更に彼エラスムスが30年に及ぶ歳月を過ぎざるを得なかった低地地方の社会構造の投影によって増幅されているように思えるのである。商業の地³²⁾、低地地方はヨーロッパを広く北から南へと遍歴するエラスムスの国際人的なファセータを支えるとともに、商業の媒介性三次性ゆえに限界を刻みつけたといえよう。では一体、低地地方の社会構造は何か、この点に目を向けることにしたい。

周知のようにフランク帝国の解体から生れた、Brabant, Henegouwen, Namen, Luik, Luxwmburg, Limburg, Loon, Zeeland, Overijssel, Drenthe, Friesland, Holland, Utrecht, Gelderlandといった“leenstaat”によって低地地方の中世的展開はその幕を開く³³⁾。特にホラント、ユトレヒト、ヘルデルランドは後のオランダの中核となるのである。ノルマンの侵攻前から舟航可能な河川に恵まれていた³⁴⁾低地地方は既にフランク帝国時代に都市の発生を見ていたが、ノルマンの来襲はこの地に政治的独立を齎らす³⁵⁾とともに西ドイツ、イングランド、スカンデナヴィヤや諸国向けの商業遍歴³⁶⁾の刺激剤ともなった。このため800年から1000年ごろまでのノルマンの侵入が終焉すると低地地方は

ヨーロッパにおける商業の復活をこれらのヴィイク集落形成を軸にして先頭をきって迎えることになった³⁷⁾。特に十字軍運動はこの傾向に拍車をかけ³⁸⁾、河川の沿岸にある荷揚港や領主居城の傍らに生れた商人集落は手工業者の居住も得て次第に都市に変貌していった。これらの地域は農村には見られぬ特殊性³⁹⁾の為に徐々にその地の領主から特許を得て自治的都市となり、南ネーデルランドでは Gent, Brugge が 12 世紀に独立権を得、北ネーデルランドでも Middelburg, Zierikzee を手始めに Amsterdam, Rotterdam もホラント伯をついだ Henegouws 家によって都市の権利を獲得した。これらの都市は領主を代表する“schout”と市民を代表する“schepenen”数人によって運営され、やがて行政を専門に担当する複数の“burgemeester”という職制が生れると司法のみに与ることになった⁴⁰⁾。これらの公職は一部市民的門閥によって独占され、この閉鎖的な彼らの集会所が制度となったのが直接市政を司ることとなる市評議会⁴¹⁾であり、都市は周囲の農村住民に都市生産品を市場で購入させる⁴²⁾などの特権を有し、かかる都市生成に並行して農村にも大きな変化が生じた。12 世紀から 14 世紀にかけての沼沢地干拓、荒地開墾といった内陸植民はその後に進み、特にシトー、プレモントレ両派の修道院は商品的農業、干拓、更には農奴解放などで先端を切り、低地南部では 12 世紀以降、北部も 14 世紀には定期小作が普及するに到った⁴³⁾。何れにせよ商業がかかる農業変化の契機であり、これら一連の胎動も南部が北部に先行しており、中世荘園制の浸透度も重なって両地域の面影には次第に格差が刻みこまれてゆくのである。

それはさて置き、これらの諸邦は、それぞれ独自性を有する地域をかかえて分立的傾向を呈していたが、更に内部にも党派の争いを過渡期多元化に即応するように有し、13 世紀末から 14 世紀末にかけては四分五裂の状態を呈した。しかし、15 世紀に入つるとブルゴーニュのもとにおかれることとなるのである。1363 年フランス王ジャン二世からブルゴーニュ公国を授与された Philips de Stoute はフランドル伯領の継承者マルガレータと結婚して低地地方への勢力伸張の機をつかんだ⁴⁴⁾。その子 Jan zonder Vreew を経て Ohilips de Goede の時代に入ると 1417 年以後のホラント伯家の内紛に乗じて Holland, Zeeland,

Henegouwen を支配下に収め、買収相続などによって南北ネーデルランドを合一し、領邦の地方主義を克服する特色ある統治を行った⁴⁵⁾。その子シャルル豪胆公は統治機構の整備と所領の拡張を企て⁴⁶⁾ フランスに倣って歩、騎、砲兵の常備軍⁴⁷⁾ を擁しエグモンド家の内紛を利して Gerle 侯領を 1473 年手中に収めた⁴⁸⁾。しかし、彼は父以来の独仏間一円に及ぶ中間国家建設に性急でありルイ 11 世の術策のため、ナンシー付近の戦いで世を去り⁴⁹⁾、彼の娘と結婚したハプスブルク家のマキシアミリンの手にブルゴーニュは入ることになるのである⁵⁰⁾。

ところで、シャルル豪胆公の残後フランス王ルイ 11 世は、Senlis 条約でブルゴーニュ領をフランス王領に組み込んだ⁵¹⁾ ので、これによって独自性を得た低地地方はフランス勢力介入を防ぐ意味もかねてマリアに六項目にわたる Groot-Privilegien を承認させ自治権を確保した⁵²⁾。しかし、1482 年マリア歿後ネーデルランドはその夫ハプスブルグ家のマキシミアンの支配下に入り、1494 年その子 Philip de Schone の統治をうけ⁵³⁾、その逝去によって 1506 年カールがこれを相続することになり、祖父、女摂政マルガレータを経て 1515 年以後自らこの地に君臨するに至るのである⁵⁴⁾。エラスムスの生きた低地地方はこういった動きを経ていたわけである。

ところで、このような一連の推移を辿ったネーデルランドは既述のように⁵⁵⁾ 商品的農業の発生とこれに対応する国内市場を有していたが、元来土地生産性の低いところであったことも作用して商業への傾斜が大きかった。低地地方で早くから最も繁栄を極めたフランドルも英仏百年戦争の原因の一つとなったようにイギリス産羊毛に依存する加工貿易的性格をもつたものであり、もともと国内市場の規模を凌駕する体質を帯び、地中海バルト海の近海貿易といった商業がこの地方の主軸をなしていたのである⁵⁶⁾。15 世紀頃から貿易港ブリージュが衰え、またイギリス毛織物工業の追い上げでなどの毛織物生産にかげりの見えたことと並行して、次第に経済的に後進地域であった低地北部の生産活動も活発になった⁵⁷⁾。特に 14 世紀末頃に魚の塩漬方法の改良が行われると、漁船、漁具の進歩、漁場の移動なども相俟ってホールン、エンクホイゼンの両

港を中心として活況をおび、西南フランス、イベリア半島から得た塩で鰯に加工を施すとともに粗塩を精製して売りさばく新しい経済分野も開かれ、返り荷として穀物、木材を輸入する海運業の発達も見られるに至った⁵⁸⁾。ヨーロッパの穀物倉といわれるアムステルダム、毛織物のライデン、ライン川の通商による Dordrecht, Dordrecht, Haarlem 更には Brugge, Antwerpen といった地域の隆盛⁵⁹⁾ はこういったメカニズムに立脚したものであったのである。いわゆるオランダ型の社会構造が見られたわけである。大塚久雄氏が明確に指摘されるように“国民経済の骨格が広大な国内市場をふまえ、それ自身独立した、豊かな社会的分業の体系として組み立てられ、その土台の上に(文字通り homespun として)成長する毛織物工業その他国民的産業の、いわば国民的余剰が国外市場に輸出されるという、そうした国内製造品の輸出を軸にした貿易のシステム構成があり”，この点で自律的比重の高いイギリス⁶⁰⁾ に対して、他国から輸入して別の国に輸出するという国際的仲継貿易つまりバルト海沿岸の穀物、スカンディナヴィヤの木材、イギリス産の毛織物ドイツ産の亜麻織物を南ヨーロッパ、後には新大陸に運び、またその逆にイタリア産の絹織物、東方諸国産の綿織物、極東の香料などを北方にといった国際的な財貨移動の媒介を営む仲立商業活動に仲継基地の存立更には工業さえもこうした国際的仲継貿易システムを土台とし、自国の生産活動に密着したものをもたないところに⁶¹⁾ 同じ海の民として共通項がありながら、既述した水平志向の寄免的性格をイギリスにもまして増幅せしめる特殊オランダ構造の基底があったと推察される⁶²⁾ のである。そういった低地地方の社会構造に投影された過渡的性格の重複された対応にネーデルランド出自の思想家全般に望見される平和への傾斜と執念⁶³⁾ の基底が存しており、また生産活動の地すべりに対応した社会構造の基底的な変革に中立無縁ともいえる商人的な限界も見られることになるのだと言ってよいであろう。こういった過渡性、あまりにも過渡的な一過性的な思想のラウムにこそまたエラスムス平和提言挫折の真因が潜んでいたと考えられるのである。

4 エピローグ

—挫折に関する考察—

それでは挫折の具体的な真因とは何か。この点について私なりの見解を提示して、この小論を閉じることにはしたい。既述したように社会経済構造に生じた一連の地すべり現象によって土地保有を基幹とした垂直的社会志向はその有効性を失ないつつあった。つまり古典荘園制を主体とした社会体制、ここでの行動原理の支持イデオロギーであったスコラ思想は封建的共同体よりの都市周辺部の形成、つまり交換価値という新しい価値次元の分出を伴ったヴィク集落発生を座標軸とした個の群れ噴出に戸惑い、到る処で亀裂を生ずることになった。垂直的な上昇志向が優位を占める片務的なその静力学的枠組は、かかる価値分出的拡張メカニズムへの弾力的対応を欠いた。これまでキリスト教的英知にとって危険な競争者として目され、一方に忠実であろうとすれば、他の一つに対して背を向けねばならないとされていたアリストテレス思想のラテン世界による12世紀以来の受容¹⁾の動きはこの端的な証左であり、周知のように、これを誰れの眼にも明白な事実としたのがナポリ大学²⁾であったことは象徴的である。事実、パリ大学に対してパリ管区会議はかかる傾向に歯止めをかけていた。1210年アリストテレスの“libri naturales”とその註解を管区会議は公的にも私的にも教授することを禁じ、違反者は破門に処するとの強硬な姿勢をとり、これがまた全般的な傾向だったのである³⁾。しかし、1224年シュタウフェン家のフリードリッヒ2世の勅許によって設立されたナポリ大学は、皇帝自身の多分に政治的なねらいもあって⁴⁾、アリストテレスの著作、アヴェロエスやアヴィセンナの註解の翻訳、アラビア語からの翻訳者の招待などによって南からヨーロッパに窓を開くことになった⁵⁾。商業的な動的世界に対応していたアラビア・イデオロギーの一つの基幹でもあったアリストテレス思想がもつダイナミックスとその導入とは従来のヨーロッパの静力学的な枠組と思考方法が異なるものであり、スコラ思想の大きな変動の契機となるものでもあった。既述した一連の社会経済構造上の地すべりが、こういつたアリストテレス受容の流れの酵母でもあったわけである。

ところで、こういったアリストテレス思想の導入はスコラ思想に様々の対応を生ぜしめ、これが、アリストテレス思想のキリスト教的英知との接合を基軸にして信仰と理性との内的総合をはかったとされるトマス・アクイナス⁶⁾ などエラスムス自身が『平和の訴え』で描き出している様々の分派⁷⁾ の対立相剋の葛藤図を織りなすものだったのであり、教皇庁自体にもそれなりの対応を迫るものであった⁸⁾。

さて、その基底には使用価値と交換価値的な商品性とを自らにおいて重合させ、かかる価値現象を経済的拡張メカニズムで実現してゆく必然を内有した個人の共同体からの分出があり、これは理性の独自領域措定と拡張メカニズムを伴うものであった。従って、猫の額のような土地獲得への“物狂い”と見える執念も実はこういった拡張メカニズムの物質的素材を媒介とした現われであり、その胎動だったのである。もはや、この拡張のメカニズムを抑えこむことはできない。つまり哲学をテオロギアの奴碑としたままの対応、更には信仰を理性への対決原理として逆方向に拡張することは無意味な行為なのである。ネーデルランドの人、エラスムスは低地地方の社会構造を背景にして、こういった時代の新しい胎動をとらえ、時代の課題に適確に対応していった。つまり商品化を媒介として次第に姿を顕わにしていた群れのな個を、叙上のようにその立脚原理である理性とその底面にある次元拡張性とを、従来の対決的な抑え込み、不具碕型化する、もはや実効性のない古い対応、更には所謂なし崩しの、場当り的な対処療法を止め、個拡張の方向に順列的に臨む理論化された共同体を構想するのである。そしてかかる存在本質に即応するモデルに個を嵌合し、時代の中に胎動する再編成要請に應えていったのだといえよう。ここにエラスムスは、理性と信仰の接合環を見出したのであり、両者共生の道をトマス・アクイナスよりも明確な形でひらいたのだといえよう。それは部分の全体への、更に昇華的な全体志向の発見に他ならなかったのである。だから、物質的な肉体と照応する部分性に基いた領土的拡張を、理性更には全体的な魂の拡張による代位的昇華で止揚し得ると確信できたのである。このためエラスムスはモデル共同体による人々の共生への道を考え得たし、そのモデルのもつ具体性を信

じ、その実効性に期待することができたのである。つまり、パラドックス的に、理性と感情、感情と感情とが葛藤し合い、敬虔がこちらへと呼ぶかと思えば、物欲があっちに引っ張り、情欲、怒り、野心、貧欲などがひきずり廻している⁹⁾ 個内部の分裂をキリストの教義で超克させようとはかったわけなのである。だが、その後のキリスト教に見られる動きはエラスムス提言の空転、挫折の雄弁な証人とも言い得るものである。こうした問題は、エラスムスより約1世紀の後に登場したスピノザによる宗教と理性乃至哲学との分離を以って始めて解決されることになるのである。

注

この小説は高瀬 学『大衆と独裁』原書房 (S. 53) に於けるマキアベリ理論へのアプローチの仕方を全面的に応用していることを断わっておきたい。

1 プロローグ

- 1) 南原 繁『政治理論史』東京大学出版会, 1973 年, 156 ページ。
- 2) 例えば、フランスのヴァロワ王家とオーストリアのハプスブルク王家のヘゲモニー争いである。箕輪三郎訳『平和の訴え』岩波文庫, 1991 年, 164 ~ 167 ページ (以後、岩波文庫と略記する)。
- 3) 朝倉純孝訳注『オランダ黄金時代史』大学書林, 昭和 55 年, 124 ページ (以後、朝倉と略記する)。
- 4) 文献の読解には、岩波文庫及び *Desiderii erasmi Opera omnia emendatiora et auctiora—Lugduni Batavorum* (完成時期不明, 一般に Leiden 版といわれる); *TOMUS IV* (翻刻版) 1980. の二点を使用する。岩波文庫では paragraph 毎に番号が用いられてが、Leiden 版にはない。便宜上、この小品では適宜この番号或は Leiden 版の paragraph を提示することにする。
- 5) フィリップ・ド・ブルゴーニュ (Philippe de Bourgogne, 1464 ~ 1524) への献辞というかたちをとっている。1500 年フランドル地方海軍総監, 1506 年ヘルデルラント地方総督, そして 1517 年ユトレヒト司教に叙任されたフィリップによって、内線の危機に直面していたエラスムスの故郷ホラントの平和回復を期待しこの書を献呈したものと思われる (岩波文庫 99, 176 ~ 180 ページ)。
- 6) 1 ~ 3. par. 1 ~ 8.
- 7) 4 ~ 9. par. 9 ~ 45.
- 8) 9 ~ 15. par. 46 ~ 101.
- 9) 16 ~ 48. par. 102 ~ 369.

10) 62 ~ 76. par. 476 ~ 597.

2 理論構成の把握

- 1) par. 8, 10, 14 ~ 16, 18, 22, 24, 26 ~ 32, 35, 37 ~ 42, 44 ~ 45., 102, 107, 109, 129, 151, 156, 161, 164, 167, 172, 174, 176 ~ 177, 180, 182, 184, 187, 191, 199, 212, 217, 219 ~ 220., 226, 229, 264 ~ 266, 314, 338, 407, 462, 465, 476, 551, 553, 557 ~ 579.
- 2) publicis commodis
- 3) pacem cum inimicis, mutuae caritatis
- 4) 像であり型である
- 5) par. 48, 52 ~ 101, 189, 190 ~ 191, 206 ~ 208, 215 ~ 217, 222 ~ 224, 231, 233 ~ 234, 240, 243, 245, 249, 252, 255 ~ 263, 266 ~ 273, 278 ~ 279, 281, 284, 291 ~ 292, 296, 302, 306 ~ 307, 316, 317 ~ 320, 334, 337 ~ 338, 343 ~ 345, 348, 369, 374 ~ 376, 378, 383, 407, 425, 427 ~ 430, 447 ~ 456, 478 ~ 491, 493, 534, 536, 538, 542, 563
- 6) par. 5, 14, 47 ~ 48, 100, 117 ~ 122, 133, 169 ~ 210, 216, 221 ~ 223, 226 ~ 227, 231, 237, 244, 246 ~ 248, 255 ~ 259, 260 ~ 263, 280 ~ 281, 285 ~ 287, 296, 299 ~ 303, 316 ~ 333, 348, 355, 369, 370 ~ 372, 374 ~ 378, 380, 383 ~ 384, 386 ~ 388, 390, 392, 394, 396 ~ 398, 401, 405, 407 ~ 413., 415 ~ 416, 418 ~ 420, 435, 439, 445, 447 ~ 449, 461, 468 ~ 469, 478 ~ 479, 480 ~ 481, 488, 494, 500 ~ 501, 507, 512, 502, 504, 512, 526, 528, 539 ~ 540, 546, 552 ~ 557, 560 ~ 571, 573 ~ 575, 577 ~ 578, 582 ~ 584, 586, 588, 597.

3 著作背景と内容分析

- 1) 岩波文庫 133 ページ。『世界の名著』中央公論社 17, 年表 521 ページ (以後, 中公と略記する)。これらの他, 朝倉, 『世界各国史』7, 中央史, 山川出版社 (以後, 山川と略記する)。
- 2) 山川 267 ページ。
- 3) 岩波文庫 134 ページ。中公 521, 522 ページ。栗原 8, 10 ページ。
- 4) 岩波文庫 135 ~ 136 ページ。中公 522 ページ。栗原 44, 76 ページ。
- 5) 岩波文庫 135 ~ 136 ページ。中公 522, 525 ページ。栗原 10, 12 ページ。
- 6) 中公 522 ページ。栗原 12 ページ。
- 7) 中公 522 ページ。栗原 14 ページ。
- 8) 中公 522 ~ 533 ページ。栗原 16 ページ。
- 9) 岩波文庫 147 ページ。中公 523 ページ。栗原 16 ページ。
- 10) 岩波文庫 149 ページ。中公 523 ~ 524 ページ。栗原 20, 22 ページ。
- 11) 中公 524 ページ。栗原 22 ページ。

- 12) 中公 524 ページ。栗原 30 ページ。
- 13) 栗原 33 ページ。
- 14) 中公 524 ページ。栗原 34 ページ。
- 15) 中公 524 ページ。栗原 36 ページ。
- 16) 栗原 40 ページ。
- 17) 岩波文庫 139 ～ 140 ページ。中公 525 ～ 526 ページ。栗原 42, 44 ページ。
- 18) 岩波文庫 168 ページ。中公 525 ページ。栗原 44 ページ。
- 19) 栗原 44 ページ。
- 20) 岩波文庫 140 ページ。中公 525 ページ。栗原 44 ページ。
- 21) この点については増田四郎『社会経済史体系』弘文堂, 高橋幸八郎『近代社会成立史論』お茶の水書房, 1971 年, 伊藤 栄『ヨーロッパ荘園制』世界史研究双書 9, 1981 年等を参照せよ。
- 22) 山川 251 ページ。伊藤 136 ページ。
- 23) 伊藤 135 ～ 136 ページ。
- 24) この点については池本正純『経済学の古典下』有斐閣新書, 1978 年 2 ～ 3 ページを参照した。
- 25) 貨幣製造, 支配階級の非生産的濫費, 現物地代の貨幣地代への転化などが例示される (伊藤 148 ページ)。
- 26) 伊藤 140 ～ 148 ページ。
- 27) 伊藤 176, 235 ～ 238 ページ。
- 28) 伊藤 248 ～ 250 ページ。
- 29) par. 36, 161, 219 ～ 221, 462, 504, 552 (ここでは平等性の考察がなされている)
- 30) 伊藤 254 ～ 255 ページ。
- 31) この対応こそスピノザの主要課題の一つといえる (拙稿『スピノザ思想の原画分析』, 1999 年 11 月出版予定, で論じているので参照していただきたい)。
- 32) par. 35 ～ 36, 502 ～ 504 ページ。
- 33) 山川 244 ページ。朝倉 108 ページ。
- 34) 伊藤 136 ページ。朝倉 108, 113 ページ。
- 35) 山川 243 ページ。
- 36) 伊藤 136 ページ。
- 37) 伊藤 136 ～ 138 ページ。
- 38) 山川 251 ページ。朝倉 113 ページ。
- 39) 山川 251 ページ。朝倉 113 ページ。
- 40) 山川 252 ページ。朝倉 113 ページ。
- 41) 山川 253 ページ。
- 42) 朝倉 114 ページ。

- 43) 山川 253 ～ 254 ページ。
- 44) 山川 255 ～ 256 ページ。朝倉 120 ～ 121 ページ。
- 45) 山川 256 ～ 257 ページ。朝倉 121 ページ。
- 46) 山川 257 ページ。
- 47) 朝倉 121 ページ。
- 48) 山川 257 ～ 258 ページ。朝倉 121 ～ 122 ページ。
- 49) 山川 258 ページ。朝倉 122 ページ。
- 50) 山川 259 ～ 260 ページ。朝倉 122 ～ 123 ページ。
- 51) 朝倉 122 ページ。
- 52) 山川 259 ページ。朝倉 122 ページ。
- 53) 山川 260 ページ。朝倉 122 ～ 123 ページ。
- 54) 山川 260 ～ 261 ページ。朝倉 123,129 ページ。
- 55) 前掲注 25) の本文参照。
- 56) 山川 265 ページ。
- 57) 山川 263 ～ 264 ページ。
- 58) 山川 264 ～ 265 ページ。朝倉 126 ～ 127 ページ。
- 59) 朝倉 127 ページ。
- 60) 岩波『社会経済史講座』VI, 330 ページ。
- 61) 前掲書, 330 ～ 331 ページ。
- 62) 前掲 注 10) 対応するに本文
- 63) par. 360.

4 エピローグ

—挫折に関する考察—

- 1) 『人類の知的遺産』20, トマス・アクイナス, 63 ページ (以後, 稲垣と略記する)。
- 2) 稲垣, 80 ページ。
- 3) 稲垣, 80 ～ 81 ページ。
- 4) 稲垣, 79 ページ。
- 5) 稲垣, 80 ～ 81 ページ。
- 6) 稲垣, 25 ～ 26 ページ。
- 7) par. 66 ～ 90.
- 8) 塩野七生『神の代理人』220 ～ 221 ページ。
- 9) par. 100.